

白川静のことば  
《23》



金子都美絵・画

鳥形の霊と化した魂は、それを念ずることによって招くことができたらしい。未亡人のことを寡かというのは、麻の喪飾りを頭につけた女が、廟中で亡き夫をしのんでいる姿である。その人の姿は、憂いにみたされている。その憂いに沈む人の後に、よりそうように雀の字をそえた字形がある。これもおそらく寡と同じ意味であるうが、その雀は、亡き夫の亡霊をしるしたものにちがいない。女が先に没すると、男のやもめを鰥かんという。魚の上に罪なみだをそいでいる形であるが、魚はのちにいうように、女性の象徴とされるものである。鰥も寡も、すべてきわめて象徴的な方法で示されているのである。

鳥形の霊となって奪去した死者の霊は、しかしかならず時を定めてその故郷にかえるものと考えられた。それは渡り鳥が、時と所とを定めて必ず飛来するというその生熊の神秘さのゆえに、容易に靈魂の觀念と結合されたのである。

『中国古代の民俗』講談社学術文庫 p38-39)

《「鰥」については『白川静のことば13』でとりあげました。》

